

二〇一二年十二月 山陰研究 第四号 抜刷
島根大学法文学部 山陰研究センター

揖夜神社蔵『哥かるた』・同『伊勢物語』について

—江戸初期松江藩主周辺の和歌事蹟—

山崎真克

揖夜神社蔵『哥かるた』・同『伊勢物語』について

—江戸初期松江藩主周辺の和歌事蹟—

山崎 真克

(比治山大学)

摘要

本稿で取り上げる揖夜神社蔵『哥かるた』・同『伊勢物語』は、奥書などはみられないものの、筆跡や伝来の状況からみて、養法院の真筆資料として認められる。『哥かるた』は、『伊勢物語』初段から五十四段までの百首を上句(宝山院筆)・下句(養法院筆)に分けて二〇〇枚一組の体裁としたものである。また『伊勢物語』(養法院筆)は、定家本系統の諸本と一致する本文を有する。

キーワード：養法院 宝山院 松江藩 伊勢物語 歌かるた

はじめに

平成二十二年十二月二十二日〜平成二十三年二月十四日に行われた八雲立つ風土記の丘新春企画「揖夜神社の宝物展」において、『哥かるた』および『伊勢物語』が展示された。¹⁾これらは、出雲松江藩第二代藩主松平綱隆(宝山院)と、その側室である養法院の書写とされるものである。稿者は、養法院を中心にこれまでも江戸初期松江藩主周辺の和歌事蹟に関する研究を行ってきた。本稿で取り上げる揖夜神社蔵『哥かるた』および『伊勢物語』は、奥書などはみられないものの、後述するように筆跡や伝来の状況からみて、養法院の真筆資料と

して認めうるものである。そのため、綱隆(宝山院)・養法院の事蹟を改めて紹介した上で、両書の書誌的事項、本文の特徴などについて述べる。

一 松平綱隆・養法院の事蹟について

『島根県大百科事典』(昭和57・7 山陰中央新報社)の記載(岩成博氏・内田文恵氏執筆)を参考にしつつ、松平綱隆および養法院の事蹟について紹介する。

松平綱隆は、寛永八年(一六三二)、出雲松江藩初代藩主松平直政(寛文六年(一六六六)没)の嫡男として江戸で生まれる。母は久姫

(松平忠良女、慶泰院へ慶安元年(一六四八)没)。父の死去により家督を継ぎ、第二代藩主となる。延宝三年(一六七五)急病のため松江にて没、四五歳。宝山院と号す。綱隆の詠草は、島根大学附属図書館桑原文庫蔵『高真院様宝山院様源林院様御詠草』(写本一冊)、島根県立図書館蔵『松平綱隆(寶山院)筆「歌集」』(複写)、平田本陣記念館(島根県出雲市)所蔵の「藤画賛」などにみられる。島根県立図書館蔵『高真院様御年譜』(成立未詳)や、桃節山著『藩祖御事蹟』(慶応三年(一八六七)跋)には、直政が烏丸光広から和歌や『伊勢物語』の口訣を受けたとの記事がみえるので、綱隆にもこれらの影響があつた可能性はある。

養法院は、綱隆と同年の寛永八年(一六三二)生まれ。明暦三年(一六五七)二八歳で綱隆の側室となり、「御国御前」と呼ばれた。父は直政に仕えた祐筆平賀半助で、その父に習った筆跡は流麗で能書家として知られている。綱隆との間に広瀬藩二代藩主近時に嫁した利喜姫、生後まもなく没した清姫、四代藩主となった吉透が生まれる。延宝三年(一六七五)に綱隆が没して養法院と名のり、以来、松江の春日村に隠居して余生を過ごす。宝永四年(一七〇七)、七七歳で没した。

養法院自身が書写した真筆資料として、現在のところ以下のものが判明している。

- ①『山下水』(河本家稽古有文館蔵)
元禄十一年(一六九八)十一月写(六八歳)
- ②『養法院実筆和歌集』(島根県立図書館蔵)
元禄十三年(一七〇〇)七月下旬写(七〇歳)
- ③『山下水』(佐太神社蔵)

宝永二年(一七〇五)初夏写(七五歳)

④『古哥仙』(佐太神社蔵)

書写年次未詳

①・②・③には、養法院のものと思しき朱印が共通して存する。また「似」を字母とする仮名「に」という特徴的な字体が①～④のすべてに使用されている。筆跡が酷似していることもあり、養法院の真筆資料として認めることができる。

また真筆資料ではないが、前述の島根大学附属図書館桑原文庫蔵『高真院様宝山院様源林院様御詠草』の成立に、養法院が大きく関与していると考えられる。初代直政(高真院)・二代綱隆(宝山院)・四代吉透(源林院)の詠草を収集したこの書は、自らに先立ち宝永二年(一七〇五)九月に亡くなった息子吉透への追善の意図を持つものと思われる。

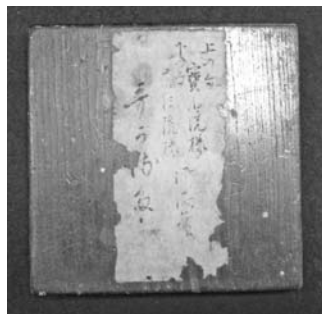
次節以降では、これらの資料との比較を行いながら、揖夜神社蔵『哥かるた』および『伊勢物語』について検討する。

二 揖夜神社蔵『哥かるた』について

揖夜神社蔵『哥かるた』は、『伊勢物語』所収歌のうち、冒頭からの一〇〇首について上の句・下の句に分けて記した『伊勢物語かるた』の一種である。二〇一枚の札が、木製の箱に収められており、保存状態は良好である。次に述べるような箱書きの記述以外には、制作年代・書写者を示す徴証は見出せない。

二一 箱書き(表)・(裏)の記述

箱書き(表)には、周囲の一部が破れた浅黄色の紙が中央に貼られており、「上の句／寶山院様／下の句／養法院様／御両筆／哥かるた」と墨書されている。これに拠れば、上の句を「宝山院」(第二代藩主松平綱隆)が、下の句を「養法院」(綱隆側室で、第四代藩主吉透の母)がそれぞれ染筆したものである。



箱書き(表)



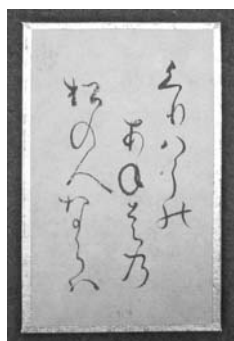
箱書き(裏)

箱書き(裏)には、白色の紙が二枚貼られており、「寶山院殿／養法院 両筆歌加留多／二百枚志箱／昭和三年三月 松平家寄進」、「寶山院 松平家第二代綱隆公／養法院 同 第四代吉透公ノ母／直政 綱隆／一綱近³／一吉透⁴」と墨書されている。これらの紙は箱書き(表)と比較して明らかに新しく、おそらく松平家から寄進された昭和三年三月に近い時期のものと考えられる。なお、箱の寸法は、縦横ともに二一・一cm×高さ八・五cmで、二層に分かれている。

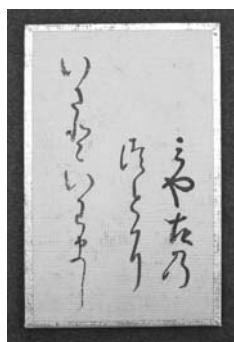
二二 かるた(表面)の和歌本文

かるたの表面には、それぞれ二行／五行の散らし書きで和歌が記さ

れる。料紙は薄香色の布目地で、上の句に比べて下の句の料紙の色がやや薄い。上の句・下の句ともに流麗な筆跡であるが、前述したような他の養法院真筆資料にみられる特徴的な字体は使用されていない。確証は得られないものの、他の真筆資料の筆跡との類似がみられるので、箱書き(表)の記述通り、上の句が「宝山院」、下の句が「養法院」の書写としておく。



第十四段22番歌上の句



第十四段22番歌下の句

また、和歌本文を『伊勢物語』諸本と比較すると、以下のような異同がみられた(歌番号は『新編国歌大観』に拠る)。

【諸本との本文異同】

- ・第十四段20番歌第四句「なるへかりけり」
 ∴ 諸本「なるへかりける」
- ・第十四段22番歌第五句「いさといわまし」
 ∴ 塗籠本「いさといはまし」、その他諸本「いさといはましを」
- ・第十五段23番歌第五句「おくも見るく」
 ∴ 諸本「おくもみるへく」
- ・第十六段26番歌第五句「たてまつりけり」
 ∴ 諸本「たてまつりけれ」

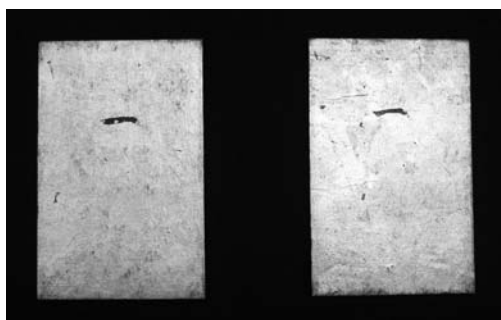
- ・第二十一段41番歌第一句「わすらむと」
∴ 諸本「わするらんと」
- ・第四十七段88番歌第一句「おぬさと」
∴ 諸本「おほぬさと」
- ・第四十七段88番歌第三句「なかれては」
∴ 諸本「なかれても」
- ・第五十三段99番歌第四句「おもふ心の^は」
∴ 諸本「おもふこころは^は」

補入・見せ消ちによる訂正もみられるものの、本文は『伊勢物語』の定家本系統の諸本とほぼ一致する。本文に異なる場合も、特定の伝本と一致するような傾向はほとんどみられず、いずれも単純な誤脱によるものと考えられる。なお、次節に述べる揖夜神社蔵『伊勢物語』では、異なるあつたこれらの和歌本文はすべて諸本と一致した形となっている。

二―三 かるた(裏面)への書き入れ

かるたの裏面は金箔仕上げで、ほとんどの札には墨書による漢数字の書き入れが存する。これは、上の句・下の句の組み合わせを示すため、『伊勢物語』の章段の順に通し番号を施したものと思われる。

しかし、一部には『伊勢物語』の配列順とは異なる漢数字が記された札や、書き入れがみられない札がある。



第一段1番歌 下の句・上の句 裏面

【『伊勢物語』の配列順と異なる札】

- ①十三「君か、たにそよるとなくなる」
∴ 第十段14番歌の下の句
- ②十四「わかおもふ人はありやなしやと」
∴ 第九段13番歌の下の句
- ③六十五「風ふけはおきつしらなみ龍田山」
「夜半にや君かひとりこゆらん」
∴ 第二十三段49番歌
- ④百「たまのを、あはほによりてむすへれは」
「たえての後もあはんとそ思ふ」
∴ 第三十五段69番歌

【書き入れがみられない札】

⑤ 「人の心のおくも見るく」^(マ)

∴第十五段23番歌の下の句

⑥ 「とをといひつ、よつはへにけり」

∴第十六段24番歌の下の句

⑦ 「つ、いつの井つ、にかけしまるかたけ」

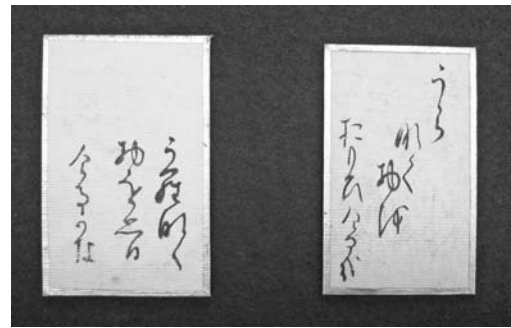
∴第二十三段47番歌の上の句

①・②は、隣接した13番歌と14番歌の下の句が入れ替わって誤った漢数字が書き入れられたものと思われるので、和歌の配列上は問題ない。

③・④は、明らかに『伊勢物語』の配列順とは異なっているが、こうした位置に置かれた原因は不明である。③・④によってずれが生じているため、「四十九」↔「六十四」と書き入れられた札の歌は、『伊勢物語』では50番歌↔65番歌に相当する。また「六十九」↔「九十九」と書き入れられた札の歌は、70番歌↔100番歌に相当する。

⑤・⑥・⑦は、それぞれ対応する上の句もしくは下の句には漢数字が書き入れられており、記入漏れと考えることができる。

なお、箱書き（裏）には「二百枚壹箱」とあるにもかかわらず、実際には二〇一枚の札が存するのは、次にあげるように和歌本文の重複した札があるためである。



本来の下の句
(大)

重複の下の句
(小)

・七拾五「うらなく物を
おもひける哉」
∴第四十九段91番歌の下の句
〔九十〕と記された下の句
の札と重複

料紙や裏面の金箔仕上げは他の札と共通するが、この札のみ縦七・〇cm×横四・三cmの寸法であり、縦七・二cm×横四・六cmの寸法である他の二〇枚と比較してやや小さい。「捨」を使用する裏面の書き入れの用字も他の札とは異なるので、別に作られた歌かるたの組の一枚が混入したものとも考えられる。

二―四 他の『伊勢物語かるた』との比較

以上のように、本文の小異、および配列の異なりや重複がみられるものの、揖夜神社蔵『哥かるた』に記された和歌は、『伊勢物語』初段から第五十四段までの一〇〇首とすべて一致している。

一般に『伊勢物語かるた』は、『伊勢物語』所収歌二〇九首のすべてを、上の句・下の句の札に分けて記したものが多⁽⁴⁾い。なかには、詠まれた歌にふさわしい情景を描いた絵が付されているものも存する。

こうしたなかで、揖夜神社蔵『哥かるた』のように冒頭の二〇〇首のみを用いてかるたに仕立てているものは、管見に入る限り他に見出せない。一〇〇首より二〇〇枚一組とする体裁は、おそらく『百人一首かるた』を踏襲したものではないかと考えられるが、類例を調査する必要がある。

三 揖夜神社蔵『伊勢物語』について

揖夜神社蔵『伊勢物語』は、写本一帖。木製の箱に収められており、保存状態は良好である。『哥かるた』と同様に、次に述べるような箱書きの記述以外には、制作年代・書写者を示す奥書などの徴証は見出せない。

三―一 箱書き(表)・(裏)の記述

箱書き(表)には、『哥かるた』と同様に、周囲の一部が破れた浅黄色の紙が中央に貼られており、「養法院様御筆／伊勢物語」と墨書されている。またその左には、別に白色の紙が貼られ、「寶山院二松平家第二代綱隆／養法院二同 第四代吉透四公ノ母／直政一綱隆二綱近三／吉透四」と墨書されている。



箱書き(表)

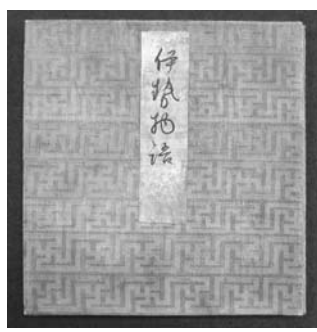


箱書き(裏)

箱書き(裏)には、箱書き(表)左側の白色の紙と同一の紙が貼られ、「伊勢物語 養法院殿筆／昭和三年三月 松平家寄進」と墨書されている。これらも『哥かるた』の箱にみられた紙と同様の体裁・内容である。なお、箱の寸法は、縦一八・〇cm×横一七・二cm×高さ八・五cmである。

三―二 書誌

本書の寸法は、縦一六・七cm×横一五・八cmで、いわゆる柗型本と呼ばれる書型である。料紙は、鳥の子紙。表紙は木賊色で、疋繋ぎの布地。朱に金箔散らしの題簽に、「伊勢物語」と外題が記される。内題はない。見返しには、藤の金箔模様が施されている。本文は一面九行。和歌は一字下げで書き始められ、二行乃至三行で書かれた後、改行せずに本文が続く。



表紙

装訂は列帖装で、六つの折りから成る。第一折りおよび第六折りが17丁、第二折りから第五折りまでが18丁で、全106丁となる。但し、2丁表、3丁表、103丁裏、106丁裏は空白である。こうした遊紙が存することから、先に綴じる作業を行った上で、本文を書写したものと考える。

られる。

一つの折りは料紙九枚を重ねたものである。一般的な列帖装の場合のように、第一折りと第六折りの一番外側の紙は、前表紙・後表紙の芯として入れこまれている。

三―三 第一折りの錯簡について

第一折りには、書写後に生じたと思しき錯簡がみられる。これは、前表紙を入れこんだ第一折りの一番外側の紙のみを折った状態で、残りの八枚を重ねて折ったものの上に置いたことに起因するものと考えられる。



最終の第六折りの始め



冒頭の錯簡部分

本文冒頭は、『伊勢物語』第十四段22番歌「栗原のあねはの松の人な

揖夜神社蔵『哥かるた』・同『伊勢物語』について―江戸初期松江藩主周辺の和歌事蹟―(山崎真克)

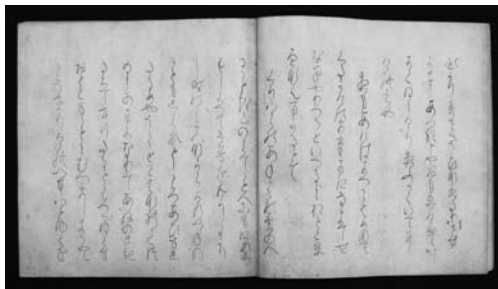
らば都のつとにいざといはましを」の第三句途中から始まる。

ならばみやこのつとにいざといは
ましをといへりければ…(1丁表)

残り八枚の外側(錯簡前の状態ならば外側から二枚目の料紙)の紙末尾には、「くりはらのあねはの松の人」(17丁裏)とあり、1丁表はその後が続く本文であることが確かめられる。

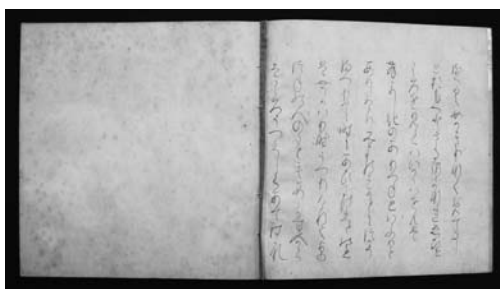


1丁表・見返し 本来は下の17丁裏に続く部分

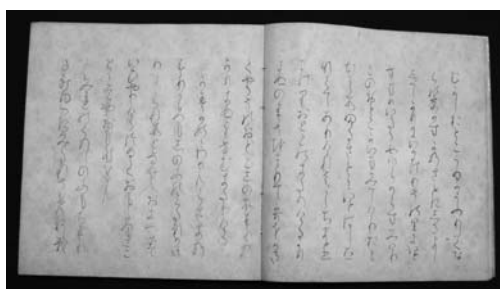


18丁表・17丁裏

また、第十六段の「…人からはこ、ろうつくしくあてはかな」で終わっている1丁裏の本文は、第二折りの冒頭「ることをこのみてこと人にもにす…」(18丁表)へと続くものである。



2丁表・1丁裏 本来は表紙すぐ後の遊紙部分



4丁表・3丁裏 本来は初段部分

したがって、錯簡が生ずる前の状態では、現在の17丁裏と18丁表の間に、1丁表・裏の1丁分があったはずである。また、現在空白となっている2丁表・裏の1丁が前表紙すぐ後の遊紙となり、次の丁(現在の3丁裏)から『伊勢物語』初段の本文が始まるという体裁であったことがうかがえる。

仮綴じの状態で書写した後、表紙を付す際にこうした錯簡が生じたものとも考えられるが、あるいはさらに後の補修の際のものである可能性もあり、詳細は不明である。

三一四 本文の特徴について

本文には補入・見せ消ちによる訂正、仮名に漢字をあてるなどの墨書による書き入れが三十例みられるものの、本文は定家本系統の諸本

とはば一致する。また諸本との本文異同もまみられるが、その場合も特定の伝本と一致するような傾向はほとんどみられず、いずれも助詞・助動詞の誤脱や、単純な誤写によるものと考えられる。

『哥かるた』と同じく流麗な筆跡であるが、前述したような他の養法院真筆資料にみられる特徴的な字体は使用されていない。やはり確証は得られないものの、他の真筆資料の筆跡との類似がみられる点により、「養法院」の書写と認めてよいと思われる。

おわりに

揖夜神社蔵『哥かるた』および『伊勢物語』について調査した結果を述べた。箱書きの記述以外には確証は見出せなかったけれども、松平家から寄進されたという伝来の状況は確かであるから、信ずるに足ると思われる。宝山院・養法院の事蹟に加えることのできる貴重な資料と言える。

ところで、島根大学名誉教授の芦田耕一先生より、松江城内に宝山院筆・養法院筆の『伊勢物語』がそれぞれ展示されているとご教示いただいた。これらは松江神社所蔵の宝物であることが判明したが、調査には及んでいない。展示物の中にはこの他に宝山院他の藩主の詠草を取めた『歌帖』『三君御詠歌』もみられる。

これらについて、『松平家寄進宝物展』平成7 松江市立松江郷土館)の「松平家寄進宝物展出品目録」には、次のように記述されている。

◆ 書画類

27 歌帖(高真院様・宝山院様自詠)

箱入

縦17.9 横15.4 厚5.7 2帖

(高真院様・宝山院様・養法院様筆) 箱入

縦18.3 横16.3 厚5.5

28 伊勢物語本(宝山院様筆)⁵⁾

箱入

縦17.2 横16.7 厚1.4 2帖

縦16.5 横15.4 厚1.5

29 三君御詠歌(直政公・綱隆公・吉透公)

箱入

縦23.5 横17.5 厚0.2 1帖

なお、『松平家寄進宝物展』四・五頁には、27、29の写真が掲載されている。「28 伊勢物語本」はやはり枳型本であるが、揖夜神社蔵『伊勢物語』と表紙の文様や一面行数は異なる。また「27 歌帖」「29 三君御詠歌」の掲載写真は、次のように判読できる。

・27 歌帖

【箱書き】「高真院様御詠歌

寶山院様御色紙御自詠」

うれしさもまつも／をしむもさくら花／

こゝろはひとつ／心なれ／とも

うきよにはと、め／をかしと春風の／

ちらすは花を、／しむ／なりけり

〔綱隆51〕

〔綱隆54〕

【外題】「高真院様御詠歌」

秋かせのたなひく／くもふきはらひ／

そらすみ／わたる／いさよひのつき

やまたかみこのまの／そらの雲はれて／

たきにかけさす秋／のよの月

つまきこる／かへる／みやまの／山もりは／

身は／こ／からし／に／さゆる／夜の月

・29 三君御詠歌

直政公御詠

三十九首

子日

初春の空にも雪は降つけとねの日の松は色増りけり

桜

さくら花折てかさ、む野山にはたれか植けむいつの世のため

白雲に霞の衣ぬきかへていつこのやまを春はゆくらむ

八重霞立も隠さて不二のねの雪をよそめの花とこそ見れ

ちる桜惜む心はわすられて又来ん春の花を待かな

〔直政11〕

〔直政18〕

〔直政27〕

〔直政1〕

〔直政2〕

〔直政3〕

〔直政4〕

〔直政5〕

【箱書き】「直政公／綱隆公／吉透公／御詠歌」(貼紙)

「三君御詠詞 巻冊」

本文の異同や、歌数・配列の違いがみられるものの、これらの和歌は以前紹介した島根大学附属図書館桑原文庫蔵「高真院様宝山院様源林院様御詠草写」に収められるものと一致する(一)内は、該当歌の作者と、前稿において翻刻の際に付した通し番号。伝来の状況からみて、「27 歌帖」のような詠歌資料を基に「29 三君御詠歌」が編纂され、直接の書承関係とは必ずしも言えないが、そうした形態の書を転写したものが桑原文庫蔵本であると考えられる。松江藩主の和歌事蹟を捉える上で、大変貴重な書であると言える。

『哥かるた』および『伊勢物語』が松平家から揖夜神社へ寄進されたのは昭和三年三月であった。これと同様に、大正末年から昭和初年にかけての時期に、十三代当主である松平直亮氏によって、島根県内の神社等に松平家ゆかりの品を寄進する動きがあったようである。現在のところ調査が及んでいないが、各所に所蔵された資料を総合的に捉えることで、江戸初期の松江藩主周辺の文学事蹟を明らかにすることができる。今後も調査を継続したい。

〔注〕

- (1) 「揖夜神社の宝物展」の展示資料は、八雲立つ風土記の丘館報二〇四号(平成23・1 今岡利江氏執筆)に紹介されている。なお本稿は、同館報二〇五号(平成23・3)に掲載された拙稿「揖夜神社蔵『哥かるた』(宝山院・養法院筆)・同『伊勢物語』(養法院筆) 解説」を基に一部改稿したものである。

- (2) 拙稿「河本家稽古有文館蔵『山水水』について―江戸初期松江藩主周辺の和歌事蹟―」(『古代中世国文学』22 平成18・6)、同「島根県立図書館蔵『養法院実筆和歌集』について―第二代松江藩主側室『養法院』の和歌事蹟―」(『古代中世国文学』23 平成19・3)、同「桑原文庫蔵『高真院様宝山院様源林院様御詠草写』について―第一代松江藩主側室『養法院』の和歌事蹟―」(『山陰研究』2 平成21・12)、同「歌集『山水水』をめぐる家と人々」(『アジア遊学』135 『出雲文化圏と東アジア』勉誠出版 平成22・7)、同「佐太神社蔵『古哥仙』について―第二代松江藩主側室『養法院』の和歌事蹟―」(『山陰研究』3 平成22・12)。

- (3) 島根県立図書館蔵「高真院様御年譜」(〇九二・八/九七)には「寛永二年(一六二五)乙丑/國侯二十五歳/頃聞和歌口決伊勢物語烏丸光廣卿」とある。

- (4) 吉田光邦氏「伊勢物語色紙歌留多帖」(芸艸堂 昭和48)、新家こずえ氏「愛媛大学付属図書館鈴鹿文庫蔵『伊勢物語かるた』―解説と翻刻―」(『愛文』19 昭和58・7)、『伊勢物語かるた・王朝へのがれ』(鉄心斎文庫所蔵伊勢物語図録第4集 平成5・4)。その他『伊勢物語』二〇九首の和歌をかるたに仕立てたものには、斎宮歴史博物館蔵「伊勢物語かるた」、徳川記念財団蔵「伊勢物語歌かるた」、永青文庫美術館蔵「伊勢物語御歌かるた」などがある。

- (5) 出展目録には「28 伊勢物語本」について「宝山院様筆」としか記されていないが、松江城内には「松平綱隆筆 松平家寄贈/伊勢物語本 1冊」「松平綱隆・養法院筆/伊勢物語本 2帖」として二点展示されていた。

〔付記〕本稿は、山陰研究センターの山陰研究プロジェクト「山陰地域文学・歴史関係資料の研究」(研究代表者：要木純一)による成果の一部である。資料の閲覧をご許可下さった揖夜神社、八雲立つ風土記の丘はじめ関係各位に厚く御礼申し上げます。

A explanation of Utakaruta and Isemonogatari in Iya Jinja

YAMAZAKI Masakatsu

(Hijiyama University Faculty of Contemporary Culture)

[Abstract]

Utakaruta and Isemonogatari in Iya Jinja taken up by this text is taken as autograph material of Yōhōin, in view of a hand or the situation of introduction, although written statements of an expert opinion are not seen. Utakaruta divides 100 from the Isemonogatari first rank to 54 steps into the phrase (written by Yōhōin) of Japanese poem (written by Hōzan'in) and the bottom, and is taken as 200-sheet a set of appearance. Isemonogatari (written by Yōhōin) it has the text which is in agreement with the books of Teika system.

Keywords : Yōhōin, Hōzan'in, Matsue clan, Isemonogatari, Utakaruta

